

博士論文（要約）

戦後日本文学の〈黒人〉

—文学／芸術／政治運動と黒人表象（1945-1961）—

西田桐子

## 【目次】

序章 .....	1
第一部 政治運動と〈黒人〉—占領される「日本人」／差別される「黒人」 .....	21
第一章 検閲から反米へ—占領期の黒人表象	
一節 「黒人」を書けるということ —占領期検閲と黒人表象.....	21
二節 文学者の平和運動と黒人	
一文芸誌『新日本文学』におけるピークスキル事件ブーム.....	37
三節 反米と共闘の可能性—西野辰吉「米系日人」(1952) .....	50
第二部 文学／芸術運動と〈黒人〉—移入され展開する黒人イメージ.....	61
第二章 翻訳される〈黒人〉—受容、継承、変革	
一節 『黒人文学全集』という現象	
—1961年の「世界で初めての壮挙！」 .....	62
二節 「黒人文学」翻訳と文学運動の連環—木島始を中心に .....	86
三節 「戦後詩」の変革とブルース	
—寺山修司のラングストン・ヒューズ受容を中心に .....	113
第三章 アヴァンギャルドな〈黒人〉—革命する黒い力を求めて.....	141
一節 岡本太郎の「黒人芸術」	
—「ぶち破る」力としての「プリミティブ」 .....	141
二節 「黒人芸術」からジャズへ	
—戦後芸術運動における「アヴァンギャルド」を巡って.....	163
三節 革命と芸術を女が描くとき—倉橋由美子の〈黒人〉 .....	183

第三部 《内なる「黒人」》／《内なる黒人》／「黒い日本人」	
—「黒人混血児」と「黒人兵」の表象を巡って.....	220
第四章 「敗戦の落とし子」は日本人か？—「黒人混血児」表象の変遷.....	221
一節 講和期の「黒人混血児」言説	
—「不幸」な「混血児」と婦人たちの哀れみ.....	222
二節 メロドラマ化される「黒人混血児」	
—獅子文六「やつさもつさ」（1952）の映画化を巡って.....	253
三節 「占領児」から「黒い日本人」へ	
—杉啓之「ペイパー・ムーン」（1958）と映画「キクとイサム」（1959）.....	290
第五章 「黒人兵」と基地—闇の奥で揺らぐ支配と差別.....	314
一節 孤独な「黒人兵」と屈している日本人	
—小島信夫「アメリカン・スクール」（1954）と堀田善衛「曇り日」（1955）.....	316
二節 基地と植民地を巡る、「黄色」の想像力	
—吉野壮児「断層」（1958）と小林勝「その席がない」（1960）.....	347
第六章 「記録」される／されなかった「黒人」	
—大江健三郎「飼育」（1958）と松本清張「黒地の絵」（1958）.....	377
一節 1958年の「黒人兵」—共通する黒人表象.....	374
二節 戦前の日本／同時代の芸術—「黒人兵」のイメージの源泉を巡って....	388
三節 「記録芸術」の臨界—表象のモードを巡って.....	403
四節 「記録」されない戦争犯罪—罪と裁きの果てに.....	425
第四部 戦後日本文学における黒人表象の画期	
—アジア・アフリカ作家会議東京大会を中心に.....	445
第七章 日本文学、アフリカに出会う	
一節 大会開催に向けて—意義と「作家的良心」.....	445
二節 アフリカとの連帯と共闘の夢.....	465
三節 近くなるアフリカ／アフリカ（人）イメージの転換.....	488
終章.....	501

## 【本文要旨】

本論文では、日本文学における黒人表象の傾向と特徴、そして変遷を明らかにすることを目指した。日本語で書かれた文学作品に登場する「黒人」を実証的かつ総体的に探究することで、日本文学における黒人表象史を立ち上げることを目的とし、それと同時に、〈黒人〉が戦後日本文学にもたらした「文学的想像力」を明らかにした。

1945年から1961年にかけて発表された、日本語で書かれた文学作品を主たる分析対象とする。実証的な探究の礎として、文芸誌や文学全集等の調査を行い、「黒人」に関連する言説を収集した。それらの種々の言説のうち、「黒人」が登場する小説については、参考資料に収めた【資料1】〈黒人〉小説年表(1945-1961年)にまとめた。【資料1】が示すように、小説に限定しても、当該期に五十を超える「黒人」が登場する作品の存在を確認できた。本論文では、小説を中心に、詩、短歌、ルポルタージュ、エッセイ、翻訳、映画のシナリオ等を含むさまざまなジャンルの文学作品の黒人表象を分析することで、作中の「黒人」が果たす機能や役割、または象徴性だけではなく、「黒人」が生み出されたイメージの源泉を探り、時期による特徴や傾向を明らかにした。作品分析の際には、著名な作品だけではなく、従来の日本近代文学研究では注目されてこなかったような作品も、黒人表象史を編む上で重要だと判断した場合には、積極的に取り上げた。

作品分析という方法論に加えて、映画・美術・音楽等と文学の関係といったクロスジャンルの探究や、文芸誌や機関誌などの雑誌や新聞等を対象としたクロスメディア的な言説分析、文字テキストの翻訳に限らない外国文化の影響受容関係の探究など複数の比較文学的アプローチを行い、多角的な視点による分析を行うことを目指した。その際には、国際的な政治情勢や国内外の社会的文化的状況や、研究や出版も含めた日本の文学場の動向には特に注意を払った。

調査の結果、日本の文学者による文学／芸術／政治運動が、戦後日本文学の黒人表象と密接に相関していることが明らかになった。本論文で扱う1945-1961年という時期こそ、黒人イメージの戦後的源泉の主たるものが出揃っていく時期であり、その意味で、本論文は、戦後日本文学の黒人表象の起点を探る探究となる。戦後日本文学の〈黒人〉は、多くの文学者たちが参与した1950年代を中心に隆盛した前衛的な諸運動—文学運動であり、しばしば同時に、芸術運動かつ政治運動でもあるような運動—によって、その輪郭が形作られたといえるのである。そうした運動の中で育まれた新たな黒人イメージこそ、抵抗と革命の象徴としての〈黒人〉である。

本論文は、四部七章構成で、序章と終章を加えた全九章からなる。

第一部では、占領期から講和期にかけての、黒人表象と文学者の反米的政治運動の関係に着目する。検閲と黒人表象の関係を明らかにした上で、文学者の政治的な運動への参与と黒人表象の関わりについて、主に共産主義と平和運動に着目して探究する。

第一章においては、占領が黒人表象に与えた影響を明らかにする。一節では、検閲が黒人表象に及ぼした影響を明らかにする。検閲条項と実際の検閲例の双方を検討することにより、検閲期において文学作品に「黒人」を描いて発表することが、事実上、困難な状況にあったことを示す。二節では、文芸誌『新日本文学』の調査をもとに、1949年にアメリカで起きたピークスキル事件と黒人に対する関心の高まりの関係に光を当てる。ピークスキル事件で重要な役割を担ったユダヤ系アメリカ人で当時共産党員だった小説家ハワード・ファストとアフリカンアメリカンで公民権運動家の歌手ポール・ロブソンに、文学者の関心が集まった背景には、占領と冷戦により高まりをみせた反米感情と平和への希求があり、ロブソンの世界的な活躍によって、日本の文学者は、黒人を芸術家による運動の先駆者としてみなすようになっていく。三節では、ピークスキル事件ブームの影響が窺える、西野辰吉「米系日人」(1952)の黒人表象を検討する。「米系日人」の「黒人兵」は、立派な人間性を備えた知的で理性的な人物として、敬意を込めて描かれている。

第二部では、主に芸術運動に着目し、文学だけではなく美術や音楽を含む外国文化の移入が、黒人表象に与えた影響に焦点を当てる。戦後文学者も多く参与し盛り上がりを見せた文学／芸術運動の渦中で、移入された黒人に関する言説やイメージは、しばしば芸術理念や運動の理論と連関し、その変化とともに変奏されていった。

第二章では、日本における「黒人文学」受容とその影響を、詩の分野を中心に検討する。一節では、日本のアフリカンアメリカン文学受容の歴史において、記念碑的刊行物となる『黒人文学全集』に着目する。『黒人文学全集』の刊行に関わった人物と集団の両面に留意して成立背景を示すとともに、その出版の意義や影響について明らかにする。二節では、『黒人文学全集』の編集者であり、「戦後詩」運動の旗手でもあった木島始に焦点を当てる。日本の「黒人文学」受容の先駆者である木島は、「黒人文学」受容の黎明期となる1950年代初頭から「黒人詩」を日本に紹介し始め、それは政治的な文学運動やジャズの受容とも深く関わっていた。三節では、寺山修司に着目し、1950年代後半以降の「黒人文学」の広まりとその影響について検討する。寺山のラングストン・ヒューズ受容を中心に検討することで、木島による「黒人文学」の翻訳が詩壇に与えた影響を、ジャズやブルースといった「黒人音楽」との関わりも含め、明らかにする。

第三章では、先行研究ではほぼ言及されることのなかった「黒人芸術」をはじめとする、西欧由来のアフリカの黒人に対するイメージに着目する。さらに、「黒人芸術」受容を、1950年代末から高まりを見せるジャズブームへと接続することを試みる。一節では、岡本太郎の「黒人芸術」受容に着目する。両大戦間期のパリで「黒人芸術 (art nègre)」に出会った岡本は、戦後に自身の芸術論を展開する中で、「黒人芸術」を、停滞し閉塞した現代社会の状況を革新する可能性をもつ芸術として、日本に広く紹介した。二節では、岡本太郎と花田清輝の共闘関係を軸に、文学者も数多く参加した戦後前衛芸術運動の中で生成されていった黒人イメージについて検討する。前衛芸術運動の渦中において「黒人文学」受容と「黒人芸術」受容が合流した先に、「黒人音楽」受容としてのジャズブームがあるという構図を描き

出すことにより、黒人イメージが、芸術的な「アヴァンギャルド」と結びついていく過程とその様相を探った。三節では、1960年代前半の倉橋由美子の小説を例に、二部を通して検討してきた黒人に対する諸イメージが、文学作品にいかんにか反映され、創造的に変奏されていたのかをみる。「黒人」に自己投影することもあった倉橋の小説には、黒人ミュージシャンや同性愛行為をする「黒人」が登場する。女であり芸術家であることの存在論的探究と、ジャン・ジュネやボーヴォワールをはじめとするフランスの文学や思想の影響によって、倉橋は革新的で奇妙な「黒人」を産み出したのである。

第三部では、「黒人混血児」と「黒人兵」という、戦後の日本に出現した実在する黒人の表象に着目する。新聞や雑誌というメディアや、映画・ルポルタージュ・「記録芸術」といった芸術ジャンルを横断し、1950年代の文学作品における「黒人混血児」表象と「黒人兵」表象の傾向と変遷を探る。

第四章では、「混血児」の成長とともにダイナミックな変遷をみせる1950年代の「黒人混血児」表象を探究する。一節では、「混血児ブーム」ともいえる現象が起きた講和期に着目する。雑誌『婦人公論』を中心に、沢田美喜、高崎節子、野上弥栄子、パール・バックなど、主に女性の手による「黒人混血児」を巡る諸言説を横断的に検討する。二節では、獅子文六の新聞小説「やつさもつさ」とその映画化に光を当てる。最初期に「黒人混血児」を書いた「やつさもつさ」は、翌年映画化される。映画の脚本を原作小説と比べることで、「混血児ブーム」の収束にともない日本社会への浸透をみせる「黒人混血児」イメージの変遷を明らかにする。三節では、杉啓之による小説「ペーパー・ムーン」(1958)と、日本社会に衝撃を与えた映画「キクとイサム」(1959)を検討することで、「黒人混血児」表象の典型と、「混血児」の成長がもたらした「黒人混血児」表象の新たな転換を探る。

第五章では、1950年代中頃から1960年代初頭にかけて発表された小説の黒人表象を分析する。この時期に、「黒人兵」が主要登場人物となる小説が増え、人種が主題となる作品が目立つようになる。第五章では、小島信夫「アメリカン・スクール」(1954)と堀田善衛「曇り日」(1955)に着目する。両者はともに、占領期の「黒人兵」を象徴的に描くことで、敗戦と占領により鬱屈する日本人男性の姿を浮かび上がらせる。二節では、吉野壮児の「断層」(1958)と小林勝「その席がない」(1960)という、ともに人種を主題の一つとする無名の二作品における黒人表象を検討する。この二作は、アメリカの白人と黒人に対する黄色い日本人という構図による人種的考察を試みているという点においても共通する。

第六章では、およそ日本文学史上最も著名な〈黒人〉小説であり、同時期に発表された二作、大江健三郎「飼育」(1958)と松本清張「黒地の絵」(1958)の黒人表象を検討する。多くの共通点をもつ二作品を比較し、「記録芸術」と戦争犯罪という新たな視点から読み直すことで、豊かな「文学的想像力」により描き出されたがゆえに例外的な表現を多く含む「飼育」と「黒地の絵」を、黒人表象史に位置付けることを目指した。

第四部は、アジア・アフリカ作家会議東京大会(以降、AA東京大会)という、戦後日本文学の黒人表象史における一大転換点を扱う。AA東京大会は、日本文学史上初めてのアフ

リカとの出会いであり、この頃より、〈黒人〉は、単なる「黒人」ではなく、「アフリカ黒人」やアメリカの黒人、カメルーンの黒人というような分節化を見せるようになる。

第七章一節では、AA 東京大会の概要を示し、その開催の経緯を明らかにすることで、安保闘争と戦争責任が、日本の文学者の大会への参与を強力に後押ししたことを示す。二節では、日本の文学者たちが AA 東京大会にみた連帯と共闘の夢に着目する。希望を抱き大会に臨んだ文学者たちは、さまざまな齟齬に直面することとなる。三節では、AA 東京大会が、戦後日本文学に及ぼした影響について検討する。多くの日本の文学者は、この大会で初めてアフリカ（人）と対峙することになり、無知を自覚する。大会開催を契機として、アフリカ理解への扉が開かれるとともに、文学作品の黒人表象も大きな転換を示す。

日本文学に戦後新たに登場した〈黒人〉は、実在の「黒人兵」や「黒人混血児」を描いた〈黒人〉だけではなく、1950年代を中心に隆盛した文学／芸術／政治運動の中で育まれた政治的かつ芸術的な「アヴァンギャルド」としての〈黒人〉である。公民権運動・反帝国主義的独立運動・平和運動などの政治的側面と、「黒人文学」「黒人芸術」「黒人音楽」といった芸術的側面の両面において、被抑圧者でありながら革新の可能性を体現する存在としてみなされた黒人は、敗戦後の日本人の共感や同情、もしくは憧れや敬意の対象となり、文学者はしばしば戦後的モチーフの一つとして「黒人」を描いた。抵抗と革命の象徴としての「黒人」は、戦後日本文学の〈黒人〉の新たな源流となっていく。

本論文によって明らかになったことを、黒人表象史として年代順に編むことを試みれば、I：占領期（1945-1952）、II：揺籃期（1953-1958）、III：転換期（1959-1961）の三期に、当該期を分けることができる。

なお、黒人表象の傾向は漸次的に変化するため、括弧内に記した年はあくまで目安とされたい。

#### I：占領期（1945-1952）

占領期は、さらに、①検閲期（1945-1949）、②朝鮮戦争期（1949-1951）、③講和期（1951-1953）の三つに分けることができ、①～③は、それぞれ「書けない」「書きたくない」「書くべき」という三つの段階に該当する。

##### ①検閲期（1945-1949）

CCD 検閲によって、事実上「黒人」を「書けない」状態にあった。【資料 1】が示すように、この時期の文学作品に「黒人」はほぼ登場しないが、この検閲という言論弾圧を含むアメリカの占領政策こそ、②の「書きたくない」が、③の「書くべき」もしくはより積極的に「書きたい」へ、と変化した大きな要因である。占領期の抑圧を梃に、日本社会全体において、反米のモードが醸成されていったのがこの時期となる。

##### ②朝鮮戦争期（1949-1951）

1949 年に CCD 検閲が終わり、黒人を「書けない」一義的な要因が取り払われたにも関わらず、「黒人」が描かれぬ時期である。日本の文学者としては、「書きたくない」時期にあたる。自己検閲以外の「書きたくない」理由としては、「黒人兵」や、とりわけ「黒人混血児」というのは、敗戦と占領の闇の部分象徴する存在であり、日本人として自らの恥部を突き付けられるようで見たくなかったという心理的理由が挙げられる。反共の防波堤として冷戦構造に日本が組み込まれていくこの時期は、期間としては短いものの、その後の黒人への関心を準備する非常に重要な時期であり、しばしば後年の〈黒人〉小説の舞台となる。

##### ③講和期（1951-1953）

占領の終結を迎え、〈黒人〉小説が一気に発表され始める。講和期の日本人の間には、①②の時期に溜め込まれた抑圧の反動から反米のモードが隆盛し、アメリカの抑圧に対する一種の告発として「黒人」が描かれ始める。占領期の批判的な見直しとともに、「黒人兵」や「黒人混血児」は、「書くべき」主題となっていくのである。

「黒人文学」受容が本格的に始まるのも、この時期である。文学者を含む多くの芸術家や知識人たちは使命感をもって新たな日本の建設に取り組んでおり、文学／芸術／政治運動にもさらなる熱気が加わった。こうした時代状況を背景に、日本の文学者たちは、同じくアメリカに抑圧された「民族」として黒人に共感し、抑圧への抵抗と抗議の声をあげる芸術として紹介された「黒人文学」は「身に近い」ものとして受容されていったのである。

## II：揺籃期（1953-1959）

揺籃期と名付けたポスト講和期から 1950 年代末にかけては、戦後日本文学にみられる主な黒人イメージの源泉が出揃い、定着と変奏を繰り返しながら日本社会へと普及していく時期である。

この時期に醸成されていく戦後的な黒人イメージは、実在の黒人と観念的な〈黒人〉に大別しうる。実在の黒人は、「黒人兵」とその子孫となる「黒人混血児」を指す。観念的な〈黒人〉というのは、主に外国文化から移入された、しばしば芸術理念と結びつくような抽象的なイメージとなる。

「黒人兵」という表象は、占領終結を迎えた日本が国際社会に復帰していくという時代状況の中で、占領や「混血児」以外の問題系とも結びついていく。国際社会における日本という国の立ち位置や、日本人という存在の人種的・民族的立場を考察しようとする作品において、「黒人兵」は、しばしば象徴的な存在として描かれる。

日本の「戦後」とともに成長した「黒人混血児」は、講和期から揺籃期にかけて大きな変化をみせる。講和期には、エリザベス・サンダースホームを始めとする「混血児」の保護養育施設に関心が集まり、「黒人混血児」を描いた小説の多くが施設を舞台としていた。最初に生まれた「混血児」が学齢に達することもあり、1952 年から 1953 年にかけて「混血児」の処遇が広く議論され一種の「混血児ブーム」の様相を呈する中で、その見慣れぬ容貌から「黒人混血児」は他の「混血児」よりも深刻な「問題」とみなされていた。同化か隔離か以外にもさまざまな選択肢が議論の俎上に上がり、一部では隔離主義が選択されるも、1953 年以降、日本社会全体としては同化の方向に舵を切り、母である日本人女性が責任をもち日本社会の中で「混血児」を育てることが期待される方向へと収斂していく。従って、揺籃期には、日本社会の中で育つ「黒人混血児」が描かれる傾向にある。

観念的な黒人イメージに関しては、アメリカからの「黒人文学」と西欧からの「黒人芸術」という、主に二つの外国文化受容の異なる流れが交差し合流していくことで、前衛や革命と結びついたアヴァンギャルドな黒人というイメージが形成されていく。「黒人文学」は主に文学／政治運動において、「黒人芸術」は主に芸術運動において、現状を打ち破る革新的な力を秘めた芸術として受容されていく。揺籃期を通して日本の芸術場に普及していった「黒人文学」と「黒人芸術」は、1960 年代初頭に到来するジャズブームを準備した。

揺籃期と転換期のはざままで活況を見せるのが 1958 年で、この頃から「黒人」が登場する小説が急増する。大江健三郎の「飼育」と松本清張の「黒地の絵」もこの〈黒人〉小説の当たり年である 1958 年に発表されている。

## III：転換期（1959-1961）

転換期は、むしろ隆盛期と呼ぶほうが適切であるほどに、黒人に対する日本の文学者の関心が高まる時期でもある。転換期とその前後一二年を含めた時期に、戦後日本文学者の黒人に対する関心は、関わった文学者の数の面においても、その関心の深さと幅広さの面におい

ても、日本文学史上最高潮に達する。【資料1】を見ても、先述したように急増を示す1958年から、1961年にかけて、毎年多くの〈黒人〉小説が発表されており、1962年には、青山光二「黒い日本人」、大江健三郎「叫び声」、木下順二「黒いなかの白い顔」、倉橋由美子「一〇〇メートル」、武田泰淳「ピラミッド付近の行方不明者」、三島由紀夫「月」が、そして1963年には有吉佐和子「非色」といった、それぞれ新しい傾向を示す重要な〈黒人〉小説が発表されている。

「黒人兵」表象の表現面に関しては、大まかな傾向として、象徴的な表現からリアリズム的描写へ、という変化が指摘できる。1950年代の黒人表象には、アフリカンアメリカンを描いていながらも象徴としての役割が強調され過ぎて実情と乖離していたり、不自然なほど理想化されていたりといった例も目立つが、転換期の頃から、個性を備えた一個の人間として現実にいそうな「黒人兵」が描かれる作品が増えるのである。

「黒人混血児」については、1959年に公開された映画「キクとイサム」が示したように、「黒人混血児」を巡る問題系そのものが大きな転換を遂げる。講和期に盛んに議論されたように、日本人を主体として「黒人混血児」の養育の責任が問われるのではなく、「黒人混血児」そのものが主体として立ち上がるのである。「黒人混血児」が中学校に通う時代を迎え、彼（女）らが、日本社会の中でいかに自立して生きていくのかという点が、ようやく問われ始めるのである。

黒人への関心が社会的な規模で高まった最大の要因は、ジャズの流行である。1950年代後半から徐々にその兆しを見せていたジャズの流行が爆発的なものとなるのは、1960年代のことである。とりわけ大江健三郎や石原慎太郎のような若い世代の文学者たちの多くがジャズに傾倒し、ジャズの愛好からブルースへと関心を広げていき、創作にも取り入れた寺山修司のような文学者も出現するようになる。従って、この頃から「黒人兵」や「黒人混血児」以外に、黒人のミュージシャンが小説に描かれ始める。

文学場への影響力に限れば、ジャズと並び重要なのが、『黒人文学全集』の刊行である。1961年から1963年にかけて出版された全十三冊の『黒人文学全集』は、日本のアフリカンアメリカン文学受容史において、最も大きな影響力をもった訳業であると同時に「黒人文学」研究の先鞭をつけた刊行物である。全集によって「黒人文学」は、文壇／出版／研究にまたがる日本の文学場において、確固たる場所を得たといえる。

この時期を文学における黒人表象の画期と呼ぶにふさわしい大転換こそ、アフリカとの出会いである。本論文では、1961年のAA東京大会をその転換を象徴する事件として取り上げたが、日本社会のアフリカに対する関心の高まりは、1950年代後半からアジア・アフリカ諸国が独立を遂げ「アフリカの年」と呼ばれる1960年にはアフリカで十七か国が独立したといった世界情勢に後押しされたものであり、文学場に限ったものではなかった。しかし、AA東京大会が「大」転換といえるほどの影響力をもちえた最大の要因は、1960年は六十年安保であった。日本の文学者たちが安保闘争をアジア・アフリカの独立を巡る諸闘争と結びつけてアピールすることによって、反帝国主義的運動であり反米的平和運動の側面も

もつ AA 東京大会の開催は決定された。当初日本の文学者たちが夢見ていたアフリカとの連帯や共闘は成就したとはいえないが、戦後日本文学の担い手たちが、アフリカ諸地域から来日した黒人と実際に顔を合わせ、アフリカについて無知であることを自覚したことの意味は大きい。1960年代を迎え、日本文学はついにアフリカ理解への扉を開けたのである。

1961年以降、アフリカ黒人を書いた小説も急増する。1950年代には、遠藤周作という例外を除き、〈黒人〉小説に表れる「黒人」のほとんどがアフリカンアメリカンであったが、先述した1962年の〈黒人〉小説のうち、大江健三郎、木下順二、武田泰淳の作品には、アメリカ人ではない「黒人」とアフリカが登場する。日本の文学者たちはAA東京大会をきっかけに、自由と独立を求める政治的な闘争主体としてのアフリカ黒人を見出していったのである。